

見えない子供たちの現実

家庭教師の目



子供を二分化する”ゆとり教育“

今回は今なおその是非が問われている“ゆとり教育”について。

○二年度から当時の文部省が改定した新指導要領に基づく学習指導が実施されています。当時の報道で、円周率三・一四の小数点以下を切り捨てるといった学習内容の間引きが明らかになり、私たち家庭教師もかなり戸惑いました。

特にひどいのは理数です。例えば、かつて小学一年で習っていた13+15など二ケタの足し算は、先延ばしで二年生から。中学理科においても、中一の「力」とはねの伸び」「水の加熱と熱量」「比熱」「水圧」「浮力」、中二の「交流と直流」「電力量」、中三の「電解質とイオン」「電池」「力の合成と分解」「仕事と仕事率」など多

くの単元が、高校へ統合されました。

こうなると、かつては中学でかじって高校で本格的にやっていたのが、高校に上がってからいきなりレベルの高い理数をマスターしなければならなくなる。大学受験が従来通り変わっていない以上、高校で一気に詰め込むしかないわけです。

こうしたやり方だと、高校に進んだ時点で、子供たちの多くが勉強に付いていけなくなります。しかも、私立文系へ進んだ場合は、高一で理数が終わり、大学受験の科目が国語、社会、英語の三教科となりまますから、進学しても理数の知識がゼロに近い大学生になってしまう。また、理系に進んでも、いい大学には、ゆとり教育では受

からないでしょう。

これを私立の中高一貫教育校は分かっているようで、新教育要領に囚われない学習指導を実施しています。ならば、「わが子も中高一貫校へやった方がいいかも」と思われるのでは？ ところが、それには先立つものが必要です。塾へやったり、家庭教師を付けたりするにしても、同じことでしょう。つまり、教育にそれなりにお金を掛けられる家庭の子はまだいいのですが、そうでない大半の子にとってゆとり教育は、学習の機会を奪うものなのです。

その結果、引き起こされるのが、貧富の差による子供たちの二分化です。私はこれが大変危惧しています。

可哀想なのは、教育費を掛けられない家庭の子だけではありません。裕福な家庭の子供たちもまた塾通いで結局、詰め込み型の学習を余儀なくされます。これが子供たちの人格形成に影を落とす結果を招いています。詰め込み学習をさせられた子は往々にして、偏った性格になりがちなのです。これをゆとり教育が招いているわけです。すから、本末転倒と言わざるを得ません。

もつと言えば、ゆとり教育は、

勉強の出来ない子に合わせすぎているとしか思えません。もしも人権の尊重や平等という教育理念から、競争を避け、子供たちに順位を付けないことがその根底にあるとしたら、それこそ問題です。実際は勉強の得意不得意、かけっこの一番とビリがあつて当然でしょう。それが現実の社会だということとは、皆さん百もご承知のはずです。

読者の皆さんも一度、お子さんの教科書を見てあげてください。特に算数なんか、驚かれることと思います。私など、これを事前一般の人が分かっていたら、新教育要領は廃案になったのではないかと思っているくらいなんです。

文・中村信二



1963年福岡県生まれ。家庭教師派遣で福岡老舗の株式会社日本学術講師会、高校入試問題集のベストセラー「虎の巻」出版の株式会社ガクジュツの代表取締役社長。福岡青年会議所で教育問題調査会副委員長や社会参画推進委員会委員長などを歴任する傍ら、TV、ラジオにも出演。現在、貧しい子供たちのための「無料塾」開設を構想している。家庭教師の問い合わせはフリーダイヤル0120-41-7337へ